

陰陽五行思想における「三合」の一考察

—和名にみえる四季の循環のなかの田の神をとおして—

曾 我 とも子 *

SOGA Tomoko

A Study of "Sango" in Yin and Yang and the Five Elements of Thought

The Case of "Coming and Going of the God of the Rice Fields"

Japanese culture has been affected by the philosophy of Yin-Yang and the Five Elements since its transmission from Korean peninsula in the 7th century. Historical folklorist Hiroko Yoshino claims that this philosophy has profoundly influenced Japanese folk culture and various rituals. In her conclusion, Yoshino claims that the reason why a deity of both rice fields and mountains doubles its territories by "coming and going" primarily in February, June and October can be explained by the influence of "Sango" (a set of three signs taken from the Chinese Zodiac). However, since her argument is based exclusively on the *Huai-nan Tzu*, an old Chinese scripture, an extensive survey of historical materials should be done in order to support this conclusion.

In this paper, I contend how rituals related to the god of the rice fields and mountains developed with the notion of "Sango". This is accomplished by taking into consideration folk ideas related to the circulation of the four seasons and various historical materials to reveal the relevance of "Sango" and the philosophy of Yin-Yang and the Five elements in Japanese folk festivities.

I contend that the transference of the philosophy of Yin-Yang and the Five Elements filtered down to the general population from the Chinese court and that this may have also been the case in Japan.

キーワード：陰陽五行 十二支 木気三合 田の神 月の和名

* 岡山大学大学院社会文化科学研究科

はじめに

古代中国で生まれた陰陽五行思想は、600 年代に朝鮮半島を経由し我が国へ導入された⁽¹⁾。

「三合」とは、陰陽五行思想のなかの方術のひとつであり、十二支（子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥）の特定の3支が結び合うことにより旺気一色となるというものである。ここから「三合」という名称が生まれたと考えられるが、紀元前成立の道教書『淮南子』を初見とし、多くの文献では「生・旺（王）・墓（死）」で表現されている。

季節のなかで取り入れられている「三合」は、春が「冬に生じ、春で旺（活発）となり、夏で死ぬ（墓）」となり、それに続く夏が「春で生じ、夏に旺となり、秋で死ぬ」、続く秋が「夏で生じ、秋で旺となり、冬で死ぬ」、続く冬が「秋で生じ、冬で旺になり、春で死ぬ」という順に巡っている。例えば春の「木気三合」の場合、春気が最も活発となるのが春旺であるが、その兆しはすでに冬から生じており、春になると夏の気配が訪れているとするものである。そして、この3季は手を結ぶことにより力強い1つの春旺の気となる。

宋代成立の占術書『淵海子平』「論十二支三合」に「三合」という言葉がみられるように、これが「三合」名称の初見と思われる。江戸時代の儒学者桜田虎門によって『淵海子平』が翻訳されたことから、日本でも知られるようになった。

吉野は、陰陽五行思想が、日本の民俗や祭りのなかに深く潜み重要な役割を担っているとしており、そのなかで「三合」にも着目し、田の神と山の神の去来が、なぜ2月・6月・10月に多いのかという疑問を「三合」に当てはめ、「亥の子の10月、春亥の子の2月、それとサノボりの行われる未月（6月）の3支が「木気三合」を構成している」[吉野 2007（1983）：270-281]としている。しかし、吉野の「陰陽五行と日本の民俗」[2007（1983）]の議論では、「三合」の出典が『淮南子』のみであるため、吉野の解説する「三合」がいかなる史料に基づくものであるのか判断することが難しい。

そこで本論文では、農耕における四季の循環を対象として、史料にも触れつつ、とくに田の神の祭りがどのように「三合」と関わっているのか、考察・分析することにした。陰陽五行思想に関する研究は、まだまだ途上段階である。民俗行事のなかに「三合」が関わっているとする考察は、今後の現代民俗学研究に一石を投じるものと考ええる。

なお、「三合」は旧暦（太陰太陽暦）での推移に合わせた構成となっているため、本論はすべて旧暦としている。

1. 陰陽五行と三合

「陰陽とは、すべてのものは陰と陽の2元から成り立つとする考えであり、五行とは、天の5惑星（木星・火星・土星・金星・水星）に対応した地上における、木・火・土・金・水の作用（行）を概念化して取り入れられたものである。天の木星に変化が起これば、それに伴って地上の木に変化が生じる。天の気は陽であり、地の気は陰であって、天から降り、地から上る気が相作用し、相抱合して、人類及びその他の萬物を発生する」[飯島 1980（1939）：198-199]。

前述したように「三合」は、生（生まれる）・旺（盛んな時期を過ごす）・墓（死ぬ）という周期をたどっており、「墓」は、死であり土に還ることを意味するが、土に還ったものは、再び生まれ循環していく。「木気三合」は亥卯未、「火気三合」は寅午戌、「水気三合」は申子辰、「金気三合」は巳酉丑で構成される。土気に関しては、五行思想では、「土」は本来、大地を表してい

るため、中央に位置しており、各季節の終わりに18日間だけ遊行する。これが季節の終わりに置かれた土用である⁽²⁾。これにより、土気は、他の4行とは別格視され、史料により「三合」として含むもの、含まないもの、また、四合(未・戌・辰・丑)として構成する場合がある。

「生旺墓」は、「三合」のみでなく方位においても見られ、これを「方合」という。東は春で「寅(生)・卯(旺)・辰(墓)」、南は夏で「巳(生)・午(旺)・未(墓)」、西は秋で「申(生)・酉(旺)・戌(墓)」、北は冬で「亥(生)・子(旺)・丑(墓)」である(図1)。

また、陰陽五行では、本来十二支は十干(甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸)と対になって用いられ、十干を天の数とし天干と呼ぶのに対し、十二支は地の数とされ地支という。

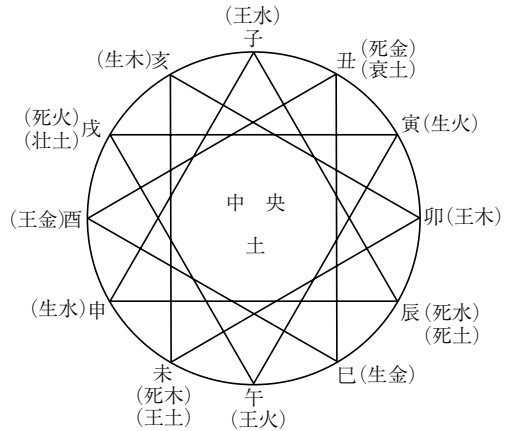


図1 「三合」と「方合」 王=旺、死=墓
[中村・古藤訳編 1998: 197] より転載。

2. 十二支・天文・三合の関係

北極星の近くに位置する北斗七星は、北極星を中心として1昼夜に1回転し、1年で4方(東・西・南・北)を1周することから、方位を12等分にし、「東西南北の正北を子、正東を卯、正南を午、正西を酉とし、子と卯の間には丑・寅(東北)、卯と午の間には辰・巳(東南)、午と酉の間には未・申(西南)、酉と子の間には戌・亥(西北)とし、これを十二辰と名付けた。辰とは「とき」即ち季節という意味である」[飯島 1979 (1939) : 198-199]。

さらに、木星(歳星)は12年で天を1周することから、1年に12区割の1つを移動することにも注目された。しかし、木星は西から東へ移動し、北斗七星の柄は東から西へ回転するため逆方向となる。そこで、木星を反映する仮の星、太歳が置かれた。この太歳に十二支(子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥)が割り振られ、これにより太歳的位置と北斗の柄の指す方向が同じとなり、季節の12ヶ月を把握することができた。この天の十二辰に対応させ、地上の十二支を「草木の発生・繁茂・成熟・伏蔵の過程、即ち陰陽の消長する順序を12の段階に分けた」[飯島 1979 (1939) : 103-104]。このことから、十二支による季節の循環は、太歳との関係から天文とも結びついている。

十二支は、旧暦では日本でも暦などに用いられ、歳(年)、月だけでなく、日、時刻にも使用された。祝祭においては、田の神における亥の子祭以外にも、5月の端午の節句、戌の日におこなう安産祈願のための帯祝い、丑の刻(午前2時)に行われる芝神楽神事(京都貴船神社)などがあり、現在でも目にすることができる。これにより「三合」を構成する十二支が天文、暦とも関係していることが解かる。

3. 十二運にみえる「三合」

『五行大義』には、1年の運気を12の運行「生死所論」(以後十二運と称す)で表しており、その十二運のなかに「三合」の存在がみられる。「十二運」は、鎌倉末期頃成立とされる『簠簋内伝」[中村 2000 (1985) : 242-329] や、室町期の『吉日考秘伝』などの陰陽書においても、その記述が

見られる⁽³⁾。藤巻は、「十二運とは、万物の盛衰、人の一生、四季の推移を12の相によって説明したものである」〔藤巻 2000: 189〕としている。12の相とは、「受気：五行の気を受ける」、「胎：胎内に宿る」、「養：胎内で養分を得て成長する」、「生：この世に生まれる」、「沐浴：清める」、「冠帯：成長する」、「臨官：一人前になる」、「王（旺）：旺盛期の頂点」、「衰：衰え始める」、「病：病気がちとなる」、「死：死ぬ」、「葬（墓）：埋葬される」となり、各五行が巡るようになっている。

『五行大義』に、「五行の生死の場所は同じでなく、12月、12時（支）に同じようにある」〔中村・古藤訳編 1998: 156〕とあり、五行は、受け気で始まり葬で終わるが、その廻りの始まりは各五行で異なる。木行は、申で気を受け未で埋葬される。火行は亥で気を受け戌で埋葬される。金行は寅で気を受け丑で埋葬される。水行は巳で気を受け辰で埋葬される。土行は亥で気を受け戌で埋葬される。火行と土行は受気と葬が同じであるが、土行は寄行があるため、衰病が同じ申にあり、十二運の巡りは火行とは異なる。寄行というのは、土が4行（木火金水）に立ち寄ることで、いわゆる土用のことである。この12の相を大きく3つに分けたのが「生」「王」「葬」であり、これが「三合」である（表1）。

『簠簋内伝』及び『吉日考秘伝』では、『五行大義』の「受気」は「絶」となっているが、どちらも、気が宙にいる状態を表すため、同質である。

表1 四季の推移・万物の盛衰・人の一生を十二支と五行で表した十二運の巡り

十二支 五行	子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥
木	沐浴	冠帯	臨官	王	衰	病	死	葬	受気	胎	養	生
火	胎	養	生	沐浴	冠帯	臨官	王	衰	病	死	葬	受気
金	死	葬	受気	胎	養	生	沐浴	冠帯	臨官	王	衰	病
水	王	衰	病	死	葬	受気	胎	養	生	沐浴	冠帯	臨官
土	胎	養	寄行	生	沐浴	冠帯	臨官	王	衰病	死	葬	受気

〔中村・古藤訳編 1998; 中村 2000〕をもとに作成。王（旺）、葬（墓）、受気（絶）。

生王葬が各五行の「三合」で、木行→亥卯未、火行→寅午戌、金行→巳酉丑、水行→申子辰、土→卯未戌である。

4. 「亥の子・春亥の子」と6月の神送り

五行における「木気三合」は、亥（10月）に木気の兆しが始まり、最も盛んな卯（2月）を経て、未（6月）に衰えるというひとつの周期をたどっており、この「亥卯未」を「生旺墓」として捉えている。吉野は、「各地の亥子神祭祀の間には、10月と2月、または10月と6月の両度に祭祀が行われる。亥としての山の神は、10月・2月の両度に祭られるときには木気に変じ、当然田の神・作物の神となる。そして、亥（10月）は「生」、卯（2月）は「旺」であるから、未（6月）に墓の行事もあるはずで、それが農村で行われてきたサノボリと呼ばれる行事である」〔吉野 2007（1983）: 275, 277〕としており、亥の子の10月、春亥の子の2月、それとサノボリの行われる未月（6月）の3支が「木気三合」を構成しているとしている。この特定の3つの月に田の神との関連があるのか、行事のなかで見ていきたい。

田の神祭りで、行われる月が定まっているものに亥の子祭があるが、大森は、「亥の子とは、10月亥の日の行事で、10日のトオカンヤが東日本でひろくおこなわれているのに対し、西日本にさかんである。2度あるいは3度ある亥の日を、武士の亥の子、百姓の亥の子、商人の亥の子などと区別して呼ぶこともあるが、普通、初亥の日を祝う。2月の初亥を春亥の子といい、春亥の子に田に降りた神が10月亥の子に家に帰っていくと伝えている地方もある」〔大森 1972: 263〕

としている。

また、サノボリに関しては「田植えはじめをサビラキ・サオリというのに対して、田植え終りの儀礼をサナブリまたはサノボリというのが一般的である」[石原 1972: 158]とあり、さらに「田の神「サ」が田に降りることを「サオリ」といい、田植えはじめの日をいうのに対して、サノボリ（サナブリ・サナボリ）は、山に帰る（登る・ノボル）という意味から、田植え終りの日をいう」[竹田 1972: 290]。

このように、10月の「亥の子」に対し2月は「春亥の子」と呼ばれており、2つは対として考えることができる。しかし、なぜ亥の月、亥の日が選ばれるのか。そして、それに対応する2月が、なぜ春亥の子と呼ばれるのか。サノボリを考察する前に、まずその疑問を解く必要があり、筆者はその答えとして以下のように考える。

12ヶ月を陰陽五行の「生旺墓」でみた場合、亥は「生」であり、10月は立冬月とも言われているように、亥の月（10月）は冬の始まりである。その冬の始まり月に行う祭りが10月の亥の子祭である。そして、亥の日は、冬の始まりの日となる。亥の子祭で初亥の日（月のなかに亥日が何日かある場合の最初の亥）が選ばれることが多いのは、そのためと思われる。

2月は十二支では卯月であるのに春亥の子と呼ばれるのは何故であろうか。これは、春を「三合」の「生旺墓」で捉えた場合に見えてくる。2月は春の「旺」で、10月は春の「生」である。春旺とは、春が最も活発となる月のことで、それが2月であるが、季節における「三合」の考え方は、その春旺の兆しは、すでに冬の10月から始まっているのである。いわゆる10月と2月は春の生旺の関係で繋がっているのである。これが、2月が10月の亥の子に対し春の亥の子と呼ばれる所以であると考ええる。

では、サノボリとは、どう結びつくのか。田の神の祭は、春秋の2季に行われ、春は1月・2月、秋は9月・10月・11月など、地域によって違いが見られる。「亥の子・春亥の子」は、その名からも見えるように月はほぼ特定されているが、サノボリは6月に多く見られるものの、祭月にバラつきがみえる（表2）。石原においても、「田植え終りの儀礼」[石原 1972: 158]とあるのみで、月は特定されていない。5月を皐月（サツキ）というのは、田植月（早苗月）のことであるから、サノボリを行なうのは、田植え後ということになり6月と考えてもおかしくはないが、サノボリは、「サオリ（サ降り）」に対して使う言葉であり、「亥の子・春亥の子」と対になっているわけではない。そこでサノボリを「6月の神送り」として考え、十二支以外に、月の異名である睦月（1月）、如月（2月）、弥生（3月）、卯月（4月）、皐月（5月）、水無月（6月）、文月（7月）、葉月（8月）、長月（9月）、神無月（10月）、霜月（11月）、師走（12月）（以後、和名と称す）の12ヶ月の成

表2 各地方のサノボリの時期

地域	サノボリの時期
野瀬大歳神社（神戸）	5月不定期
山王神社（神戸下唐櫃）	旧暦6月1日
三重県	6月末（以前は旧暦6月）
香川県	6月中旬
淡路島仁井村	旧暦6月15日
兵庫県美囊郡・加東郡	6月4日
広島県比婆郡東南部	半夏の朝
高知県幡多郡	部落全体の田植えのすむのを待ち、日を定める

[吉野 2007（1983）: 277] をもとに作成。

り立ちを考えながら探してみたい。

5. 和名にみる「三合」

『万葉集』に「四月と五月と…」（3885番）、「六月の…」（1995番）とあるように、数詞に仮名文字の和名が付されており、仮名文字は平安中期には使用されていたことから、その後に、それに合わせた漢字が当てられたと考えられる。よって、平安末期頃までには、和名は成立していたと思われる。

和名は、その名称からみて、草木、いわゆる稲の成長周期を表していると思われる。

折口信夫は、「神無月に出雲の神を送るというが、実は田の神のことである。出雲と田の神は関係があるらしい」[折口 1997: 35]としている。

和名には諸説あるが、いずれも似通っており、草木、特に稲の成長に関するものが多い。それをまとめたのが表3である。語源1は稲の成長を中心にした説であり、それ以外の意味合いが含まれているものを語源2とし、『日本語源広辞典』[増井 2010: 892]、『日本語源大辞典』[前田監修 2005: 179, 354, 388, 556, 635, 837, 984, 1064, 1079]、『漢字源』[藤堂・松本・竹田編 1989: 402, 593, 594, 794]から抜き出した。そして、それに陰陽五行における「生旺墓」を当てはめてみることにした（表3）。

弥生に関して『漢字源』では、「弥生の弥は彌と同じで水のみなぎるさまを表わし、彌は弭に同義で、止めるという意味」[藤堂・松本・竹田編 1989: 593-594]であるとしている。

また、10月は「全国の神が出雲に行く」というのが通説となっているが、その理由として増井は、「1年の事を相談するため」[増井 2010: 892]という説を出している。[折口 1997: 35]の説と結びつければ、田の神々が、来年1年の稲のことを相談するために出雲へ出向く月という考え方もできる。

さらに表3から窺えることは、12ヶ月を1サイクルとして見た場合、草木の周期に滞りが見られることである。これは、稲の生育過程が1年に1回ではないことを示していると思われる。これに「生旺墓」を当てると3ヶ月周期の流れになっていることがわかる。

さらに、これを「三合」に当てはめて、木気10月・2月・6月、火気1月・5月・9月、金気4月・8月・12月、水気7月・11月・3月と置き換えれば、はっきりとした四季（春夏秋冬）の特徴が

表3 月の和名とその語源

月・支	和名・季節（生旺墓）	語源1	語源2
1月・寅	睦月・春（生）	稲の実をはじめて水に浸す	陽気が地中から蒸す
2月・卯	如月・春（旺）	草木の芽が張り出す	正月に来た春がさらに春めく
3月・辰	弥生・春（墓）	草木が芽吹く	広がった草木がそこで止まる
4月・巳	卯月・夏（生）	稲を植える	1年の循環の境目
5月・午	皐月・夏（旺）	苗代から水田へ植え替える	清新な夏を愛でる
6月・未	水無月・夏（墓）	農事を皆し尽きる	水泉が滴り尽きる
7月・申	文月・秋（生）	稲穂のつぼみを見る	秋風が立つ
8月・酉	葉月・秋（旺）	稲の穂が張る	稲の実が広がる
9月・戌	長月・秋（墓）	稲を刈る	長雨で物忌み
10月・亥	神無月・冬（生）	新穀で酒を醸す	神が集まって相談
11月・子	霜月・冬（旺）	新穀を神に供する	食物月・新陽が生じる
12月・丑	師走・冬（墓）	稲のない田のさま	四季が果てる

[増井 2010; 前田監修 2005; 藤堂・松本・竹田編 1989]をもとに作成。

見えてくる。「三合」は3支が結ばれることにより旺気一色となるので、「春は草木の芽が張り出し、緑が被う陽気の発達する季節、夏は太陽が昇り清新な夏を愛でる田植えの季節、秋は、稲穂がはり稲の実が広がる黄金色の季節、冬は、新穀ができたことを神に感謝し供える季節」という四季をみることができる。これが、順当な四季の巡りを願って季節に内蔵された「三合」呪術であると考え（表4）。これにより、和名からは、10月・2月・6月の結びつきが見られ、それにより「亥の子・春亥の子」と、「6月の神送り神事」の関係も見えてくる。これが、和名に施された五穀豊穡を願う呪術と考える。

では、この和名に施された「三合」方術は、宮廷の外にも伝授されたのであろうか。

和名は、神社の祭りにおいても見えており、賀茂神社（福井市大森町）の「睦月神事」、重蔵神社（石川県輪島市）の「如月祭」、二荒山神社（栃木県日光市）の「弥生祭」などがある。

800年の歴史を持つ賀茂神社は、京都の賀茂御祖神社（通称下賀茂神社）を勧請したもので、五穀豊穡を祈る「睦月神事」は、国の重要無形民俗文化財に指定されている伝統行事である。

重蔵神社は『延喜式』『神名帳』にも名のある古い神社で、「如月祭」では重蔵神社へお供物（米）を運ぶ「献備式」が行なわれる。

二荒山神社は、神山ともされる日光男体山に鎮座し、創建は800年頃とされ、「弥生祭」では神輿が本社と滝尾神社の間を渡御する。祭神においては、重蔵神社、賀茂神社、二荒山神社の3神社ともに穀物神である大国主命を祀っており、農耕に関する行事であることから、これらの祭りは田の神に由来するものと思われる。

このように和名は平安時代に遡る古代から使用されていたことが推察されるが、その意味も複数あるように、いつどのように始まったのか判然としない。

宮中祭祀として神社で行われていた田の神祭りと、それに使用された和名が、どのように農村と結びついたのか、次に神社と農村の関わりをみてみたい。

6. 田の神と神社

田の神の祭りは、その名のごとく神であることから神の社（やしろ）、いわゆる神社で行われることが多い。860年代頃の成立とされる『令集解』『儀制令』に「古記云。春時祭田之日。謂國郡郷里毎村在社神。人夫集聚祭。（略）春秋二時祭也」（古記にいう、春の日に行われる田の祭

表4 「三合」における四季の循環

四季	月・十二支	和名・季節・生旺墓	語源
春	10月・亥	神無月・冬（生）	稲について神が集まって相談・新穀で酒を醸す
	2月・卯	如月・春（旺）	草木の芽が張り出す・陽気が発達する時節
	6月・未	水無月・夏（墓）	農事をし尽きる・暑さで水が枯れる
夏	1月・寅	睦月・春（生）	稲の実を水に浸す・陽気が地中から蒸す
	5月・午	皐月・夏（旺）	田植え月・清新な夏を愛でる
	9月・戌	長月・秋（墓）	稲刈り月・長雨で物忌み月
秋	4月・巳	卯月・夏（生）	稲を植える・1年の循環の境目
	8月・酉	葉月・秋（旺）	稲穂がはる・稲の実が広がる
	12月・丑	師走・冬（墓）	稲のない田・四季が果てる
冬	7月・申	文月・秋（生）	稲穂の含む月・秋風が立つ
	11月・子	霜月・冬（旺）	新穀を神に供する・新陽が生じる
	3月・辰	弥生・春（墓）	豊富な水で草木が広がり、そこで止まる

[増井 2010; 前田監修 2005; 藤堂・松本・竹田編 1989] をもとに作成。語源は表3の語源1と語源2を合わせたもの。

りと謂うのは、国郡郷里の村ごとに神の社があり、農民たちが集まって祭ること。（略）これは春秋2季に行われる祭りである）〔黑板・国史大系編修会編 1972: 723〕とあるように、古代から日本の村々には神社があり、春秋の2回、田の神祭りを行っていたことがみえる。

さらに、11月に行われる新嘗祭は宮中祭祀で、天皇が新穀を神祇に供えるものであるが、新穀を献上するのは農村であり、農家である。作物の出来は人間の生死に関わるものであり、これにより農村でも五穀豊穡を願うのは当然のことで、宮中で行われていた田の神祭が、神社を通して農村や農家に下りていったのが農村での田の神祭の始まりと思われる。そして、それは和名の中に込められた五穀豊穡を願う「三合」方術を内に含んだまま伝承として伝えられていった。成立時の史料がなく、和名の語源が複数あることから、それは覗える。

方術とは呪術であり、呪術は本来秘儀とされるものである。それは、現代における天皇の宮中祭祀の多くが秘儀とされていることから推測できるものである。

宮廷祭祀が民間へ伝わった事例が中国に見られる。晋代成立とされる『西京雜記』に、宮廷の侍女だった賈佩蘭という女性が宮廷を出されたあと、宮中で行われていた祭りごとを夫に語って聞かせていたのが民間に伝わった始まりであるとしている⁽⁴⁾。これは、あくまでも中国の事例である。しかし、日本においても宮中で働いていた者が宮中内の出来事を宮中で話すことにより民間へ流布された可能性も考えられる。

おわりに

古代中国で生まれた陰陽五行思想は600年代に朝鮮半島を経由し我が国へ導入された。

「三合」は、陰陽五行思想のなかの方術のひとつであり、萬物や季節、人の一生を「生旺墓」で表現し、墓は死を意味するが、それは土に還ることであり、そこからまた生へと循環する。

木星（歳星）が1年に1区画ずつ西から東へ移動することに目をつけたが、北斗七星の柄は1辰ずつ東から西へ回転するため、反対を指し示す。それにより架空の星太歳を置き、それに十二支が配された。十二支による四季の循環は、天空の星の動きに関係しており、天文とも関わりが深く、これにより暦も作られた。日本の祝祭には、暦の年・月・日により、亥の子祭以外にも端午の節句、丑の刻神事、戌の日（腹帯祝い）など、十二支で表わしているものもあり、暦が日本のなかで浸透していることも、陰陽五行を窺わすものである。

十二支以外に季節を表す言葉として和名（睦月、如月…）の存在があるが、和名は、神社の祭りにもみられ、十二支だけでなく古代から使用されていたことが祭りの名称でみることができる。

和名は、その内容から、草木の成長過程を表わしているが、田植え時期が1年に1回とは限らないと同様、1年が12ヶ月の1サイクルとはなっておらず、和名に「生旺墓」を当てはめると、草木の生成過程が3ヶ月1サイクルとなっていることがわかる。これを「三合」に当てはめ置き換えると、3ヶ月1サイクルが4つ（四季）あり、12ヶ月のなかの四季（春夏秋冬）の特徴がはっきりと見え、四季が順当な周期に当てはまっていることがわかる。ここから、10月の亥の子、2月の春亥の子、6月神送りが「三合」構成となっていることがわかった。「三合」方術は、五穀豊穡を願い、和名のなかに施された呪術であった。

『令集解』『儀制令』には「村ごとに神社があり、農民たちが集まって春秋2季に田の神祭りが行われていた」とあるように、古代からすでに農村では田の神祭りは行われていた。

新嘗祭は本来、宮中祭祀であるが、新嘗を献上するのは農村である。天皇の宮中祭祀の多くが

秘儀とされていることから推測できるように、和名に込められた「三合」方術は、田の神信仰とともに神社を通して農村へ伝えられたと考えられる。

また、宮廷祭祀が民間へ伝わった事例が中国の文献『西京雜記』に見られる。宮廷で仕えていた侍女が、宮廷の外で語ったことが始まりとされる。事例は中国であっても、宮廷で働いていた者によって宮中から外へ祭祀が流布することは、日本においても可能性としてありうることと思われる。

註

- (1) 『日本書紀』推古天皇10年（602）10月に、「曆本、天文・地理、遁甲方術の書が百済僧觀勒によりもたらされ、朝廷では書生3～4人を選んで觀勒に従い学ばせた。陽胡史祖玉陳は曆法を習い、大友村主高聡は天文・遁甲を学び、山背臣日立は方術を学び、学業を成しとげた」とする記述がある。原文：「百済僧觀勒來之、仍貢曆本及天文・地理書、并遁甲・方術之書也。是時選書生三四人、以俾學習於觀勒矣、陽胡史祖玉陳習曆法、大友村主高聡学天文・遁甲、山背臣日立並立学方術、皆学以成業」[黑板・国史大系編修会編 1967]
- (2) 1年を360日と考え、5つの季節で割ると、春・夏・秋・冬・土用は、それぞれ72日間となる。土用だけは各季節の終わりにおかれるので、 $72 \div 4$ で18日間となる。
- (3) 本稿においてはいずれも中村璋八著『日本陰陽道書の研究』[中村 2000（1985）]に依拠した。前者の正式名称は『三国相伝陰陽輶轄簠簋内伝金烏玉兔集』であり、編者は、文頭に「天文司郎安倍博士吉備后胤清明朝臣撰」とあることから安倍晴明と推定されている。後者は賀茂在盛の撰によるものである。
- (4) 『西京雜記』は漢代の逸話、逸聞を集めた雑書で、晋代の葛洪の著とされる。下記9月9日の重陽の節句は、日本でも行われている五節句の1つで、陽の極数9が重なることから重陽といい、京都上賀茂神社では本殿に菊花を供え、菊酒をふるまい、無病息災を祈願している。原文：「戚夫人侍兒賈佩蘭、後出為扶風人段儒妻、説在宮内時、十月十五日、共入靈女廟、以豚黍樂神、吹笛擊筑。至七月七日、臨百子池、作于樂、樂畢、以五色縷相羈、謂之相連綬。八月四日、出雕房北戸、竹下圍棋、勝者終年有福、負者終年疾病。取絲縷、就北辰星求長命乃免。九月九日佩茱萸、食蓬餌、飲菊花酒、云令人長壽。正月上辰出池邊盥濯、食蓬餌以祓妖邪。三月上巳、張樂於流水」[周校注 2006]（訳：戚夫人の侍女であった賈佩蘭は宮廷を出た後、扶風に住む段儒という男の妻となった。賈佩蘭が語った宮中行事は次のようなものである。10月15日には、共に靈女廟に御参りして豚や唐黍を神様に供える。7月7日には、百子池のほとりで、西域の于国の音楽を演奏する。8月4日は、雕房の北口から出て竹の下で碁を打つ。勝った者はその年は幸福になり、負けた者は病気になる。しかし、糸を手にかけて北極星に長寿を願うと病を免れる。9月には茱萸を腰にさげ、よもぎを食べて、菊花酒を飲む。これを行うと長生きできるといわれている。正月初旬の辰の日は、池のほとりで体を洗い、蓬を食べ、厄を祓う。3月初旬の巳の日には川のほとりで音楽を演奏する）

文献

- 飯島忠夫 1979（1939）『飯島忠夫著作集4 天文曆法と陰陽五行説』第一書房
 石原綏代 1972「田畑の仕事」大間知篤三ほか編『民俗の事典』岩崎美術社
 竹田 旦 1972「サノボリ」大塚民俗学会編『日本民俗事典』弘文堂
 大森志郎 1972「年中行事」大間知篤三ほか編『民俗の事典』岩崎美術社
 折口信夫 1997『折口信夫全集18 女の香炉・大倭宮廷の靦業期』中央公論社

- 楠山春樹訳 1984『新釈漢文大系 54 淮南子（上）』明治書院
- 黒板勝美・国史大系編修会編 1967『新訂増補国史大系 日本書記後篇』吉川弘文館
- 黒板勝美・国史大系編修会編 1972『新訂増補国史大系普及版 令集解第 3』吉川弘文館
- 周 天游校注 2006『西京雜記』三秦出版社
- 藤堂明保・松本 昭・竹田 晃編 1989『漢字源』学習研究社
- 中村璋八・古藤友子訳編 1998『新編漢文選・思想・歴史シリーズ 7 五行大義 上』明治書院
- 中村璋八 2000（1985）『日本陰陽道書の研究 増補版』汲古書院
- 橋本文三郎 2003『歳時記語源辞典』文芸社
- 藤巻一保 2000『安倍晴明占術大全一簠簋内伝金烏玉兔集現代語訳総解説』学習研究社
- 前田富祺監修 2005『日本語源大辞典』小学館
- 増井金典 2010『日本語源広辞典』ミネルヴァ書房
- 吉野裕子 2007（1983）「陰陽五行と日本の民俗」『吉野裕子全集 5』人文書院